（別紙様式６）

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）

県政の課題（テーマ）報告書

令和１年６月１５日

山梨県知事 殿

氏　　名　　伊藤 華那

留 学 先　　アメリカ合衆国

留学期間　　平成 30 年 8 月 17 日

～令和 1 年 6 月 11 日

１　研究の課題（テーマ）

しなやかな心の育成のために必要な取り組みについて

２　概要

与えられた県政の課題（テーマ）の解決に導く考え方及び対応策等

① しなやかな心の育成が地域と人々をよりよくする

誰もが自分自身を好きになってのびのびと生きられる社会こそが目指すべき社会だと思っております。自分自身を認められれば他者を受け入れる心の余裕もできます。 自分を表現する人が増え、たくさんのアイデアが集まり、それを受容し合えます。 それが、地域の活性化にも繋がるでしょう。高校英語教師という視点から私の県政の課題のテーマ「しなやかな心の育成のために必要な取り組みについて」を考えると、英語力を高めることと、しなやかな心を育成することは良い相互作用を生み出し、成長を高めるための良い循環を生み出すだろうと思います。

アメリカに留学して思ったことは、日本に比べ人のことを気にせず自分を表現できる人が多いこと。ではなぜそのようにできるのか、それは、日本に比べ多様性を受け入れやすい環境でした。アメリカは日本とは違いたくさんの人種が集まっているので、そのような環境なのかも知れません。しかし、これからどんどんグローバル化していく日本、山梨も将来的にはリニアモーターカーが通るので、近い将来はグローバル化するでしょう。そんな未来に備え、様々な人々を受け入れられるようなしなやかな心を育成することは平和な過ごしやすい地域を作るためにも非常に重要になって来ます。グローバル化して行く社会では必ず求められる英語力と多様性を受容するしなやかな心。そんな地域を作ることに将来的に貢献したいと思い、一年弱のアメリカで学んだことや経験を元に対応策をあげます。

② 留学先での発見と具体策

『多様性を認められる社会を作るために』

大学で、ジェンダーの講義を多く受けていた経験から、多様性とは何かと考えた際、私にとって多様性とは人種のことだけでなくセクシャルマイノリティーのことも含まれます。日本よりもセクシャルマイノリティーが暮らしやすい社会を作ることに積極的なアメリカに留学したので、普段の生活から日本とは違うと感じたことに意識を向けていました。いくつか印象的だと思った出来事をあげると、①大学に入学した地点でセクシュアルマイノリティーに関する知識があるのが当然。②自身のセクシャリティーを隠す人が少ない。ということです。私は交換留学生として、新大学１年生が参加するオリエンテーションに参加したのですが、まず、オリエンテーションの一つにジェンダーに関する講義があったことが印象的でした。私が知る限りですが、日本ではこういったデリケートな内容に関しては興味がある人だけが知る。という傾向があるからです。しかし、全員が必ず受ける講義としてあったのが驚きでした。また、その後にそれについての自分の意見を述べる場が設けられましたが、全員一言ずつ自分の意見が言えるほどの知識と考えがありました。また、② 自身のセクシャリティーを隠す人が少ないという発見に関してですが、これに関しても日本で見たことがない状況に多く出くわしました。私は日本にいる際、大学でのジェンダーの授業以外に身近でセクシャルマイノリティーと言われる方にはお会いしたことがありませんでした。それは全くいないということではなく未だに偏見があり公表することが生きにくさにつながる社会だからです。アメリカで感じたのは、何の前触れもなしに当たり前のように自身がセクシャルマイノリティーであることを前提に話をする人が多く、耳を傾ける側もそこに関しては食いつくことなくあたかも当たり前のように話を聞いていました。そこから気づいたことは、やはり、大学入学以前の段階で教育することは、セクシャルマイノリティーを悪い意味で特別視しないことに繋がり、それはやがて全ての人が自分らしく生きられる社会を作ることにつながるだろうということです。細かいことを言えば、アメリカでもまだまだ当事者にとって完璧に生きやすい社会とは言えないかもしれません。しかし、私が実際に目で見て感じた限り、日本の社会よりも人々の多様性を当たり前のように受け入れる環境が整っていました。

《具体策》

高校での課外学習の一環に、ジェンダーについて学ぶ時間を設け、多様性を学ばせ個性の大切さを理解できる生徒を育てる。まだそれぞれの専門分野に分かれていない高校生に指導することは、将来的に幅広い範囲の人が様々な多様性を受け入れるようになることにつながるであろうという狙いがある。

『伝えられる英語力をつけるために』

留学中、自分の英語力にはなかなか自信が持てませんでした。その理由として、これまで日本で英語教育を受けてきた際、英語を話す実践型の授業がなかなかなかったこともあげられますが、自分の意見を述べる述べない以前に、正しい発音をすることに重きを置かれ過ぎていた気がします。正しい発音で英語を話すことは確かにとても大切です。しかし、言語は実際に話すことで上達します。正しい綺麗な発音にこだわりすぎていると、現時点の発音に自信の無さから英語を人前で話すことを恐れてしまいがちです。実際私にもその傾向がありました。しかし、私と英語を聞き取れる能力に関して大差はないものの、私よりはるかに会話能力が高い留学生がたくさんいました。客観的に見ても、残念ながら日本人留学生の会話力は他の国からの留学生に比べて低い傾向にありました。セントノーバート大学には、世界の様々な地域からの留学生がいました。中東、ヨーロッパ、南米、東南アジアから東アジア。会話力が高い彼らに共通することは、パーフェクトな発音にこだわらずに自信を持って堂々と英語を話していたという点です。日本語訛りの英語の発音があるように、彼らもそれぞれ自国の言葉の訛りが英語の発音にも影響していました。しかし、決して聞き取れないというわけではなく意味は理解できるのです。英語の発音というと、世界にはたくさんのバリエーションがあるにもかかわらず、大きな代表的な英語圏のものをイメージするのが一般的です。例えば、イギリス英語、アメリカ英語、カナダ英語やオーストラリア英語。しかし、英語が第二言語として話されているインドやシンガポールの訛りもあります。アメリカの中でも移民が多い地域だと、南米の言語訛りの英語が飛び交います。視野を広く持ち、しなやかな心で世界の様々な英語の発音を知り受け入れることができれば私たちの日本語訛りの英語にも自信を持つことができ堂々と話せるようになるのではないかと思います。正しい発音を身に付けることはその次でもいいのではないでしょうか。まずは堂々と話せる会話力をつけるため、英語の発音はそれぞれの出身国の個性の一つだということを知れば楽になる気がします。どんなにネイティブとはかけ離れた発音をしていても笑う人はいませんでした。英語教育の際に、こういった世界には色々な英語があることを教えることは、視野を広げる点でも自分の英語に自信を持たせるという点でもとても効果的だろうと考えました。

《具体策》

世界で通用する会話力を身につけさせるために、世界の様々な英語の発音に触れさせ、聞き取れる力をつける。様々な国の人が話す英語に慣れさせることによって、ネイティブの英語発音を目指すことへの執着心を一旦手放し、まずは英語を人前で話すことへの抵抗をなくし、自分の気持ちを堂々と伝えられる力をつけることを目指す。

③ まとめ

今回の留学で、様々な国からの留学生に出会った経験や、多様性を受け入れる柔軟な人々に出会った経験のおかげで、今後グローバル化していくであろう山梨で様々な人が住みやすい社会を作るためのヒントを得ることができました。
まず大切なことは、世界には様々な人がいるということを知ること。そして、自分もそのうちの個性ある１人だと自覚し、互いに認め合える心を育成すること。さらに、その個々の意見に耳を傾け合える社会を作ることで、自分の胸に秘めていた意見を発しやすくなり、結果的にみんなで生きやすい素敵な社会を作れると思いました。私は今回の留学を通して自信もついた反面、まだまだ自分がいかに世間知らずで英語力がないことを自覚できました。この留学で得た気づきを胸に、まずは自分が上記に挙げたことを実践できるようにならなければなりません。今後も至らない点を向上するための努力を継続し、さらに成長した後、教育する立場の人間になりたいと思いました。

３　添付書類

詳細について、図・表・写真などの資料も含めてＡ４縦版５枚以内にまとめて報告してください。

※パソコン・ワープロの使用可（使用する文字は１２ポイントとしてください。）